

研究題目	グレゴリオ聖歌の新リズム研究 — 融化現象に着目して	報告書作成者	佐々木悠
研究従事者	佐々木悠		
研究目的	<p>グレゴリオ聖歌研究において、1970年代に提唱されたセミオロジーは、それまでのソレム唱法に対する疑問を深め、世界的な議論を呼び起こすきっかけとなった。そもそもソレム唱法の起源は19世紀後半に起きたドイツおよびフランスの典礼運動にある。そこで問題となったのは、聖歌および賛美歌の旋律であった。プロテスタント教会 — 特にドイツのルター派 — におけるコラールに関しては、16世紀にその原点を遡ることができたため、カトリック教会のグレゴリオ聖歌に比べると、それほどどの困難は見られなかった。これに対して、グレゴリオ聖歌には、問題が山積していた。第一に、同じ歌詞を持つものに、多様な旋律が伝承されており、どれが原型なのかが全く分からなくなっていた。これは、グレゴリオ聖歌の起源の問題と絡み、不明とされていた。第二に、4線譜よりもさらに古い手書き写本による楽譜（19世紀当時は、楽譜なのかも疑問視されていた）が各地の修道院に残されており、その意味は明らかにされていなかった。16世紀には、当時一流の教会音楽作曲家とされていたパレストリーナがグレゴリオ聖歌の編纂を命じられたが、彼でさえも古い写本に辿り着くことができず、最終的には伝承を尊重した4線譜による「メディチ版」の出版で一応の決着が見られた。このため、19世紀のドイツとフランスでは、手書き写本の調査・解読が聖歌集編纂の第一段階として考えられ、実行された。その過程で、フランス・ベネディクト会のソレム修道院が研究の中心となり、写本の整理がなされ、一応の聖歌として「ヴァティカン版」(1908)が刊行された。しかしそこで大きな課題として残ったのが、演奏法であった。ソレム修道院の研究者たちは、それを解決する方法として、計量リズムの適用や、アルシス・テーシスといった概念を創造し、それが1970年代まで世界各地で広く普及していた。</p> <p>それに反旗を翻したのが、セミオロジーを唱えたカルディーヌであった。彼は、手書き写本に残された記号「ネウマ」を実際の音響的現象に置き換え、そこから全てを再興する提案をした。リズムに関しては、ソレムのリズム理解（2分割・3分割、アルシス、テーシス）を根底から覆し、旋律のリズムと歌詞のリズム（音節の長短、抑揚）の関係性が指摘され、様々な観点から研究が行われてきた。その中でも申請者は、ラテン語の発音上の特殊な現象「融化（Liquescence）」に着目し、それが旋律のリズムとして意図的に取捨選択され、その際に神学的意味付け（ラテン教父アウグスティヌスによる）がなされていた仮説を示してきた。しかしこれを裏付けるには、さらに検討を深める必要がある。そのため本研究では未検討の曲について、歌詞の融化が旋律のリズムにどのように取り入れられ、そこにどのような神学的意味付けがなされたかを明らかにすることを目的として設定した。</p>		

研究内容	<p>先に述べた目的を達成するために、未検討の曲について、下記の手順で研究を行った。</p> <p>① 歌詞の融化と旋律の融化を調べ、両者の相違を比較する 歌詞の融化と旋律のリズムとしての融化を示す「融化ネウマ」を比較する。これにより、その2つが一致する箇所と一致しない箇所が明らかになる。</p> <p>② ①のリズムの効果と、その理由をラテン教父の代表的な神学者アウグスティヌスの著作に見出す 融化ネウマの有無に起因する音楽的な効果（強調あるいは非強調）を調べる。そしてその理由を、歌詞の聖書箇所に関するアウグスティヌスの著作から考える。アウグスティヌスの著作を参照するのは、グレゴリオ聖歌が成立した中世ヨーロッパにおいて、ラテン教父アウグスティヌスの神学が普及していたからである。</p> <p>ここでは本年度の研究の対象とした曲の中から、主の昇天（In Ascensione Domini）に含まれる固有唱に関して述べる。ここに含まれるのは、In. Viri Galilaei, All. Ascendit Dei, All. Dominus in Sina, Of. Aseendit Deus, Of. Viri Galilaei, Co. Data est mihi, Co. Signa eos, Co. Psallite Domino — ある。この作品を選択した理由は、既に写本毎の比較研究を基にした旋律修復が終わっていることから、研究に際して旋律の問題を考慮する必要がなかったことにある。手順は既に述べた方法を採用し、7曲の聖歌について各々考察を行った。特に本研究では、アウグスティヌスの著作との整合性、そこからの影響について、ネウマを様々な観点から解釈しようと試みた。まず融化ネウマが置かれている言葉について、その言葉がアウグスティヌスの著作においてどのように解釈されているかを、ラテン語と翻訳（ドイツ語、英語）の著作を解読した。次にアウグスティヌスが解釈した内容が、融化ネウマとしてどのように音楽的に表現されている（強調されている or 強調されていない）かどうかについて検討を加えた。なおその結果は、2019年にドイツ・バウツェンで開催された国際グレゴリオ聖歌学会国際大会で発表することができた。詳細は発表時の配布資料 1 を参照されたい。</p>
------	--

研究のポイント	<p>研究のポイントは、融化ネウマの解釈を、内容的な面に関してアウグスティヌスの著作に求め、そこから新しいリズム論の構築 — グレゴリオ聖歌は、何らかの一定のリズム論を前提に作られたのではなく、神学的内容の強調・非強調を音楽的に表す手段として、言葉の発音により生じる音響現象をリズムとして前提にしていた — をしようとした点にある。これまで、聖歌の神学的解釈は、現代の神学というざっくりとした観点から行われてきた。しかし、中世にはアウグスティヌスの神学論が広く読まれ、その流れは現代の神学とは幾分異なっていることが分かってきている。つまり、グレゴリオ聖歌そのものの解釈も、当時の潮流を踏まえて解読される必要がある。そこで、アウグスティヌスの著作に基づき、その聖歌の神学的解釈を行い、それが融化ネウマのリズムにどのように反映されているかを解析しようとした。</p>
研究結果	<p>本研究により、融化がグレゴリオ聖歌の旋律のリズムとして、意図的に取捨選択されていた事実が一定程度、裏付けられたと考えられる。その作者の意図は、アウグスティヌスの著作における神学的内容と一致している場合もあれば、そうでない場合もみられた。2019年の国際学会における申請者の発表に際しても、大方、これまでの研究に基づく仮説や、研究方法について賛同を得ることができた。今後、さらに音声学的な観点を加えた研究を進めることにより、従来の計量的リズムを基礎とする「ソレム唱法」のリズム理解(2分割・3分割、アルシス、テーシス)を180度転換させるものと予想される。さらにグレゴリオ聖歌を、ルネサンス以降の計量的リズムによる音楽の原点とする歴史観を根底から覆すことになると思われる。</p>
今後の課題	<p>本助成金の支援により、前年度までの結果を含め、国際学会の世界大会で発表を行うことができた。その発表における質疑や、他国の研究者とのやり取りにより、研究者の仮説 — グレゴリオ聖歌のリズムが単なる計量的な意味にとどまることなく、そこに作者の神学的解釈が含まれていたのではないか — について一定以上の理解を得ることができた。しかし、「融化」自体の定義の問題や、音声学的な視点との関係、グレゴリオ聖歌の他の要素との絡みから見えてくる点についても、さらなる検討が必要であることも明らかになった。今後も考察を続けると同時に、それを実際に演奏した際にどのような効果が生まれ、その効果が聴く人にどのような意味を感じさせるかも考察して行く必要がある。</p>